

『吹笛』 杜甫

杜甫晩年の漂泊

吹笛 杜甫 吹笛 杜甫

吹笛秋山風月清 笛を吹く秋山風月の清きに

誰家巧作斷腸聲 誰が家か巧みに断腸の声を作す

風飄律呂相和切 風は律呂を飄して相和すること切に

月傍関山幾處明 月は関山に傍うて幾処か明らかなる

胡騎中宵堪北走 胡騎中宵北走するに堪えたり

武陵一曲想南征 武陵の一曲は南征を想う

胡園楊柳今揺落 胡園の楊柳は今揺落す

何得愁中卻盡生 何ぞ得ん愁中却って尽く生ずるを

【語句の意味】

律呂 音楽の調子を一まとめにした呼称で、陽六を律

といひ、陰六を呂とし、合わせて十二とする。

関山 関所と山。国境の山。ここでは起句の秋山のこ

と。「関山月」という曲名を引用している。唐代の頃、北方や西方の異民族を胡と呼び、その兵士の多くは騎馬であった。

北 走

武陵一曲

北へ逃げ帰る。晋の將軍劉琨（二七〇〜三二八年）が孤立無援に堪え并州（現在の山西省太原）を守っていた時、一夜城楼に上り笛を吹くと、その悲しい笛の音に胡軍は皆涙を流し故郷を懐い、囲みを解いて北へ逃げ去ったという故事。後漢の馬援は武陵（湖南省北部）に遠征した時、部下の笛に合わせて「武溪深」という歌をつくり、僻地遠征のさびしさを詠んだ。

■武溪深

滔々たる武溪 一に何ぞ深き

鳥飛んで度らず 獸臨む能はず

嗟哉武溪は毒淫多し

ふるさと。ここでは杜甫の居住していた長安を指す。

楊も柳もやなぎ。「折楊柳」という送別時の曲が伏線にある。

【詩の意味】

(首聯) 笛を吹く秋山風月の清きに

誰が家か巧みに断腸の声を作す

秋の山辺、風月の清き夜、笛を吹く者がいる。あのように巧に腸を断たしめるような物悲しい笛の音はどの家の者だろうか。

(頷聯)

風は律呂を飄して相和すること切に
月は関山に傍うて幾処か明らかなる

笛の音は時に高く時に低く、風に乗って調和しながら切々と迫ってくる。月は秋山に昇り、山並みに傍うていくつかの峰に明るく冴え渡る。このような笛の音を聞けば、「関山月」の曲を思い出して、旅にある身の寂しさに堪えることができない。

(頸聯)

胡騎中宵北走するに堪えたり
武陵の一曲は南征を想う

晋の劉琨の故事のように、荒々しい胡の騎兵も悲しい笛の音に耐えられず、夜のうちに北方へ逃げ去ったことだろう。また、後漢の馬援が南方の武陵に遠征した時、笛曲をつくって部下の吹く笛に和して歌ったというが、その時の悲しみもこのようであつただろう。

(尾聯)

故園の楊柳は今揺落す
何ぞ得ん愁中卻つて尽く生ずるを

さて、故郷（長安）の楊柳も、秋となり葉も落ち尽したことであろう。それなのに、今巧みな「折楊柳」の曲を聞くと、かえって愁いの中に楊柳の芽が生じてくる思いがする。どうしてその枝を折って別れの嘆きをくり返すことが出来ようか。

《参 考》

■関山月 漢代の樂府で横笛曲に記録される曲名。笛や笙などの器楽の曲である。辺境の塞や関所を守る兵士の家人との別離を悲しむ曲が多い。

■劉琨の故事を直接詩にした作品例

胡笛曲

王昌齡

城南 虜已に合し

一夜 幾重にか囲む

自ずから金笳の引有り

能く出塞をして飛ばしむ

聴は関月に臨んで苦え

清は海風に入りて微かなり

三奏す 高樓の 曉

故人 涙を掩うて帰る

(意 解)

町の南にえびすの軍勢はすでに集結を終え、一夜のうちにわが町を幾重にも包囲した。だが、こちらはこちらで、金笳の曲というものがあり、出塞の調べを敵中に向け飛ばすことができるのだ。

その曲の調べは、じっと耳を澄ませば関所の山にさし昇

る月を前に、いよいよ冴えわたり、清い音色は海から吹きわたる風の中にすいこまれてかすかに流れていく。

この哀切な調べを高殿の夜明けに三たび奏でたとき、えびすは涙にくれて故郷へと帰っていった。

【鑑賞】

■叶わなかった帰郷の願い

杜甫漂泊の旅は大暦元年（七六六）夔州（現四川省奉節県）に至る。杜甫五十五歳。

五十七歳の正月当地を去るまでの二年間に生涯一四五〇余首の全作品のうち「吹笛」「登高」など四三〇余首の作品を作っている。

前半四句は情景描写であるが、「関山月」を詠み込み後半四句の心情表現の伏線になっている。この「関山月」や第五句の劉琨の故事、六句の馬援の故事はいずれも遠征した兵士の悲しみ、家族や故郷を思う気持を詠ったものである。

杜甫にとって戦は目の前にある存在で、安祿山の乱が起こつてその軍に捕えられたり、戦のために行く先々で辛苦をなめさせられたりして、北方の不安定な情勢は故郷（長安）への帰還を許さなかった。杜甫は安定した世の中になり、故郷に帰ることをどれだけ願ったことだろう。

第七句で故郷の楊柳は揺落、第八句で愁いの中に尽く生ずる楊柳、つまり葉が落ちると萌え出るとを対比させてい

る。杜甫の胸中は葉が芽吹き繁って行き、その繁った枝を再び折って別れの嘆きをくり返したくはないという思いなのだろう。

ここに、戦が終わり故郷へ帰るまで生き抜こうという杜甫の強い意志を感じるのである。

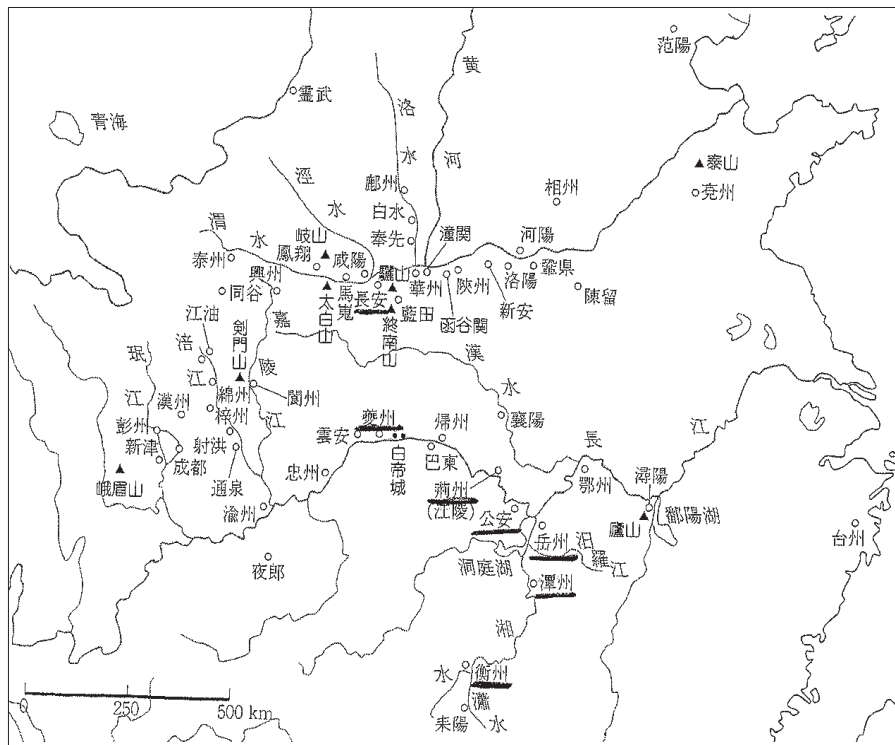
■その後の杜甫

杜甫の庇護を受ける暮しは長続きせず、転地を繰り返す。大暦三年（七六八）早春。

夔州を出た杜甫は三峡を下り、荊州（江陵）・公安・岳州を経て、翌年の春に洞庭湖に入る。その湖を南に進み、そこに注ぎこむ湘水に入り三月潭州に着く。そこから上流の衡州の刺史をしている昔の知人韋之晋を頼ろうと南へ向かう。しかし着いてみると、すでに潭州刺史に転任したあとで、再び潭州へ引き返す。だが頼みの彼は病没してしまふ。

生活はいよいよ行きづまり、舟をねぐらとしていたらしい。健康状態も一段と悪化して、右手は利かず、片方の耳はずでに聴力を失っていた。

そして、湘水を上下するうちに大暦五年（七七〇）の冬、湘水に浮かぶ小舟の中で没した。行年五十九であった。故郷へ帰ることは叶わなかったが、苦難の絶えないその生涯から解き放たれたのである。



杜甫関連地図

■李白の「春夜聞笛」との比較

春夜聞笛

李白

誰家玉笛暗飛聲

誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす

散入春風滿洛城 散じて春風に入りて洛城に満つ
 此夜曲中折柳 此夜曲中折柳を聞き
 何人不起故園情 何人か起さざらん故園の情を

「吹笛」の首聯と尾聯の四行を並べると

吹笛秋山風月清
 誰家巧作斷腸聲
 故園楊柳今搖落
 何得愁中卻盡生

となり、前掲李白の「春夜…」と一見似ているのが分かる。どちらも、夜に巧みな笛の音を聞いて作詩しており、「折楊柳」を聞き故郷を思い、物悲しい気持ちになっている。

しかしよく読んでみると、同じ故郷への思いであっても、李白の詩はなんとなくロマンティックで、春の笛の音を楽しんでいられるようにも感じられる。一方、杜甫の詩はもっと現実的で、望郷の思いが切実である。

杜甫は官僚社会の中で、上昇志向を持っていたが叶えられず、戦乱に喘ぎながら、家族を養うことに懸命で、常に故郷に帰りたいと願っていた。

李白はまったく正反対で、官界で出世する意志などなく、家庭などというものに拘束される気もなかったようである。同じように夜、笛を聞いて作った詩にも二人の「生き様」の違いが表われるのかもしれない。